

曼殊沙華

神村ふじを

曼珠沙華の標準和名は彼岸花である。彼岸花は日本全国の野山で普通に見られるが、中国から渡ってきた外来種らしい。

俳句の世界では、子季語こきごと呼ばれ、親となる季語の持つ感覚をより繊細に表現するために使われることがある。曼珠沙華は天界に咲く赤い花を表す梵語であるため、死人花、天蓋花、幽霊花などが子季語となっている。秋、田畑の畦や土手に群生する。墓地の近辺に見られることが多いためか、彼岸花と呼ばれることが一般的である。

「じゃがたらお春」と呼ばれた女性こきごは、長崎生まれの少女である。生年は定かではないが、寛永年間（1624～1644）の始め頃の生まれだと言われる。そんなお春は、寛永十六年（1639）、ジャガタラ（現インドネシア）へ流される。つまり流罪である。罪状は外国人と日本人との間に生まれた子どもであること、ただそれだけだった。

平戸に伝来したキリスト教は、繁栄、弾圧、潜伏の時代を経て今がある。特に250年余りに及んだ長く厳しい弾圧時代、長崎の町では数々の悲惨な出来事が起こった。その悲劇を味わったひとりが、外国人と日本人との間に生まれたまだうら若き少女、「じゃがたらお春」であった。

赤い花なら曼珠沙華 阿蘭陀屋敷に雨が降るおらんた

濡れて泣いてる じゃがたらお春

遠いジャガタラの地で、故郷恋しさのあまり、南蛮船に手紙を託したお春。それを取り上げたのが昭和十四年（1939）のこの曲「長崎物語」（梅木三郎作詞、佐々木俊一作曲）である。罪のない我が身、あまりの理不尽さ、曼殊沙華の赤い花があまりにも悲しい。長崎市玉園町の聖福寺境内には「じゃがたらお春の碑」があり、歌人吉井勇の歌を言語学者新村出が揮毫している。

生きながらにして曼殊沙華が似合うかのように謳われたお春。この季語に希望とか未来とかを見出すことはほとんどできないが、せめてこのような俳句で稿を終えたいものである。

黄泉の国きつと夕映え曼殊沙華 萩野谷三和